

マグエ省イラワジ河右岸のセイシーチョウンの調査

ミャンマーの寺院セイシーチョウン（19世紀）には、僧院の柱と貫が残っている。柱は332本あり、ビルマ最大の規模をはこった。ミャンマーは、高温多雨の気候のため、木造建造物が傷みやすい。この僧院も洪水による損傷が大きかったという。古い仏塔の調査においても、周囲に存在したであろう木造建造物に注意を払う必要がある。本文47ページ参照（撮影／森本 晋）

中国遼寧省・ラマトン墓地出土遺物の保存研究

ラマトン遺跡は、大凌河北岸の丘陵斜面に形成された3世紀末～4世紀代の鮮卑族の墓地。近年の調査で、金属器が多数に見えられた。武器・武具・馬具などは、韓国・日本の出土品と密接に関係しており、今後の研究が期待される。写真は鮮卑族特有の鹿の飾り物で、韓国・日本には類似製品が及んでいない。本文46ページ参照（撮影／佃 幹雄）

スラ・スラン西岸でのレーダー探査

バンテアイ・クテイ東側のスラ・スラン西岸で、レーダー探査をおこなった。中央の人物がレーダー本体を牽引し、左側の人物が手にもつ装置で制御とデータ蓄積をおこなう。東西にレーダーを走査し、西岸に沿う石組みの溝を確認した。本文40ページ参照（撮影／杉山 洋）

バンテアイ・クテイでの発掘調査

上智大学と共同で、カンボジアのバンテアイ・クテイ寺院を発掘調査している。バンテアイ・クテイは、アンコール・ワットの北西4 kmにある12世紀末の寺院。写真奥に映る前柱殿南側のラテライト積み建物の基壇を調整中。本文47ページ参照（撮影／杉山 洋）

黍田15号墳出土の双龍環頭大刀

韓国加耶地方の環頭大刀をまねて造った日本（倭）製の金鋼大刀。倭製環頭大刀としては上質の部類に属し、6世紀末の製品。とくに銀板に打ち出し文様を施した鞘口金具の例は全国的に珍しい。保存処理に際しては、大刀の製作工程をわかりやすくするため、あえて柄本を復原せず、出土状態を保存するために最善の努力を費やした。左：出土状況、中：処理後（佩表）、右：処理後（佩裏）。本文8ページ参照（撮影／牛嶋 茂）

山田寺東回廊再現

山田寺第4～6次調査で出土した回廊の建築部材は、14年の歳月をかけて、ようやくPEGによる保存処理が完了した。飛鳥資料館第2展示室では、柱間3間分の部材を、当時の構造と規模がわかるように再現展示した。山田寺東回廊は本造寺院建築の現存する最古の実例となる。
本文65ページ参照（撮影／井上直夫）

高御座の1/10模型

平城宮第1次大極殿1/10模型の内部に設置する高御座の復原模型。平成度即位式に使われた現存高御座を基本資料としつつ、文献史料からの検討をくわえ、さらに古代建造物や正倉院宝物などを参考にして、奈良時代の高御座を復原設計した。
本文22ページ参照（撮影／佃 幹雄）



建設中の朱雀門初重屋根

平城宮朱雀門の初重屋根、野垂木を組み立てているところ。野隔木の奥にみえる樹皮のついたままの丸太は、軒の垂れ下がりを防ぐための枯木（構造補強材）である。本文60ページ参照（撮影／春日井道彦）



建設中の東院庭園平橋

平城宮東院庭園の園池にはりだす中央建物から東の対岸に平橋がかかる。写真は塗装前で、親柱の擬宝珠（黒漆塗りの焼き物）もまだとりつけない段階。本文61ページ参照（撮影／西山和宏）